新しい薬学をめざして 37, 112-113 (2008).

憲法9条と私　18

しっかりと声を出して伝えていきたい

谷口美保子

戦後，高度経済成長期に生まれた私は，両親から戦争体験についてよく聞かされました。母はB29がバラバラと音を立ててやってきた時の恐怖やその下で逃げまどったこと，結核を患っていた父は徴兵を逃れたが，そのことを恥ずかしく思ったこと。しかし，闘病生活を見舞ってくれた友人は，ほとんど帰らぬ人となってしまったこと。土のあるところは，すべて芋などの作物が植えられ，とてもひもじい思いをした毎日だったことなど，昔話のようによく語ってくれました。私が生まれ，小学生時代を過ごした家は，西宮の空襲の時に父と叔母が必死で焼夷弾を消し止め，焼け残った家だと聞きました。西宮の空襲は8月6日，広島の原爆投下と同じ日でした。その日，伯父は広島の大学で被爆しました。

「平和な今は有難い」「食べたいものが食べられるのは有難い」「命と物を大切にしないといけない」といつも言っていた両親の言葉は，戦争を知らない私にも平和な世の中でなければいけないと強く感じさせてくれました。

日本は，南京大虐殺で罪もない多くの中国の人々を残虐な方法で殺し，従軍慰安婦としてアジアの多くの女性の人生を奪ってきました。また国内では，青年が赤紙だけで召集され，若い命が遠く離れた戦地で無駄に失われていきました。沖縄では集団自決が日本兵の指導のもとに行われたにもかかわらず，今なおそのことが歴史として正しく記され，償われるということにはなっていません。まだ，中国には日本軍が埋めた毒ガスが残され，今でも負傷する人が後を絶たないと聞いています。

日本が戦争中に『日の丸』『君が代』を掲げ，如何に残虐なことをしてきたかを知るにつれ，今の憲法 9 条を変えようとする流れの恐ろしさをひしひしと感じるようになりました。「二度と子どもたちを戦場に送ってはならない」「子どものためにも，平和な世の中を守らなければならない」。子どもを育てながら，平和を考える集会に出るようになりました。子どもには『日の丸』『君が代』は嫌いだから，入学式には，立たないし，歌わないと宣言をしてきました。「なんで？」と子どもに聞かれると，その理由を説明しました。

息子は高校生の頃に，日本軍が残していった遺棄毒ガスによって今も苦しんでいる人がいることを描いたドキュメンタリー「にがい涙の大地から」を見た後に，より深く知るための中国へのスタディーツアーに参加しました。撫順戦犯管理所や731部隊の跡地に行き，現地の方の話を聞いてきました。親からもらった平和の大切さを子どもたちへ伝えていくこと，戦争体験のない私にできることは，親の経験を無駄にしないということしかありません。

今では『日の丸』『君が代』が子どもの入学式や卒業式に当然のごとく組み込まれ，教育の中でも強要されています。『日の丸』『君が代』に疑問を持たない多くの保護者もいます。勇気が要りますが，式の途中で『君が代』の時に座る行為は，私にとって今の教育の中での些細な

抵抗のひとつです。かつて，日本の研究者が 731 部隊でどんなに残虐な行為をしてきたかをしっかりと心に留め，平和な時代でなければ，科学が私たちの生活を豊かにできないことを，子どもたちにはっきりと伝えていかなければならないと思います。そして今，9 条を持つ日本国憲法は世界でも誇れる平和憲法であることを，平和が脅かされようとしている今だからこそ，しっかりと声を出して伝えていくのが私たちの役割だと思います。